

# イスラエル 考古学研究会

ニュースレター

No. 5

2008年2月

## テル・レヘシュ

### 第3次調査・速報

日野 宏

テル・レヘシュ遺跡の第3次調査は2007年8月5日より開始し、8月28日に現場での作業を終了した。第3次調査では第2次調査までの調査の成果を受けて、これまでに設定した調査区を更に掘り進めたところと、新たに調査を設定して調査をおこなったところがある。特に今回は上・下二段で構成される遺跡の下段に新たに調査区(C2i7, i9 および D2a9 区、E2a8, c8 区)を設定した。以下、北部の調査区から順に説明する。

#### 下のテラス

C2i7, i9 および D2a9 区は遺跡の下段北西部に認められる幅約30メートルのテラスにある。ここに設けた調査区からは、それぞれ南北方向の鉄器時代I期の石積みの壁が検出

されている。C2i7 区では平行する南北に延びる二列の壁の中央に東西の壁が取り付けられており、その東に入り口が設けられていた。調査範囲が狭く、これらの遺構の性格を俄かに判断できないが、C2i9 区からは香炉が出土しているほか、このテラスの調査では聖樹を描いた把手の破片が出土しており、何らかの祭祀に係わる遺構がこのテラスに設けられていたと推測される。E2a8, c8 区は E2a8 区で転落石とみられる多量の礫の拡がり認められたが、他には顕著な遺構は検出されなかった。

#### 「城門地区」

アクロポリス北部は地形から城門があると推定されたので、前回「城門地区」として報告した地域である。ここではこれまで調査を行った地区(D3j5 区、E3a5 区、E3b4 区、E3d1, d3 区、E3e3 区、E3f3 区)を更に掘り進めた所と新たに調査区を設置した所(D3d4-5, e4-5 区)がある。これまでの調査によって、ここに遺跡の北部を画する鉄器時代I期からII期に亘る東西方向の城壁を確認している。その東部には塔を構成するとみられる南北方向の壁が取り付く。今回、城壁の外側に接して広がる礫群についても調査を実施した。中期青銅器時代の土器なども出土しているが、まだ、その性格や年代を確定するに至っていない。今後の調査の成果を俟ちたい。



「城門地区」を北から望む



「城門地区」を西から望む

D3d4-5, e4-5 区は城壁の南側の斜面がアクロポリスの平地へと移行する変換点にあっている。D3e5 区では鉄器時代の最上層にあるとみられる石敷遺構のほか、両側に板石を立てた南北方向の溝や直径 1 メートル前後の土坑を検出している。なお、D3d5 区では 1 メートル大の石を南北に並べた石列を検出したが、D3e4 区でもやはり南北方向の大型の石列を検出しており、これが城門に係わる遺構なのかどうか、その性格や時期について今後の検討が必要である。

### アクロポリス南部

アクロポリスの南の調査区では、これまで確認していた鉄器時代 I 期の建物の東側でこれと同時期の周囲に石積みを行なった一辺 2 メートル程の方形の土坑を検出した (D4e10 区)。東半は調査区外であるため、全容は不明である。D4e9 区ではこれまで検出していたプラスター床面の下層の状況を探るため更に掘り下げを行なった。顕著な遺構は検出していないが、後期青銅器時代から鉄器時代の遺物が出土している。

D4a10 区はアクロポリスの南西隅に当たるが、ここではアクロポリスを方形に囲う城壁の西辺の壁を検出した。この壁の上面は表土上に露出しており、その南では南西隅を確認した。

アクロポリス南側のテラスの調査 (D6e2 区) では後期青銅器時代の石積みの壁と、その内側と北側で石敷を確認した。北側は道路、内側は建物の床面と考えられる。この壁には扉の軸受が認められ、ここに入り口があったと考えられる。

### 東側城壁地区

前回「東側城壁地区」として報告した地区 (D6i5, j5 区、D6i7 区) では、それぞれ城壁に取り付くと見られる東西方向の壁を検出していたが、今回の調査では、その間と西側に調査区 (D6i6 区、D6h5-7 区) を設定した。D6h7 区では第 2 次調査で検出した東西壁の入り口部の西側の端を確認した。この壁には南北の壁が北と南にそれぞれ取り付き、部屋を構成する。北側の壁には東西の壁が取り付き、3 つの部屋を構成する。これらの建物は鉄器時代 I 期の

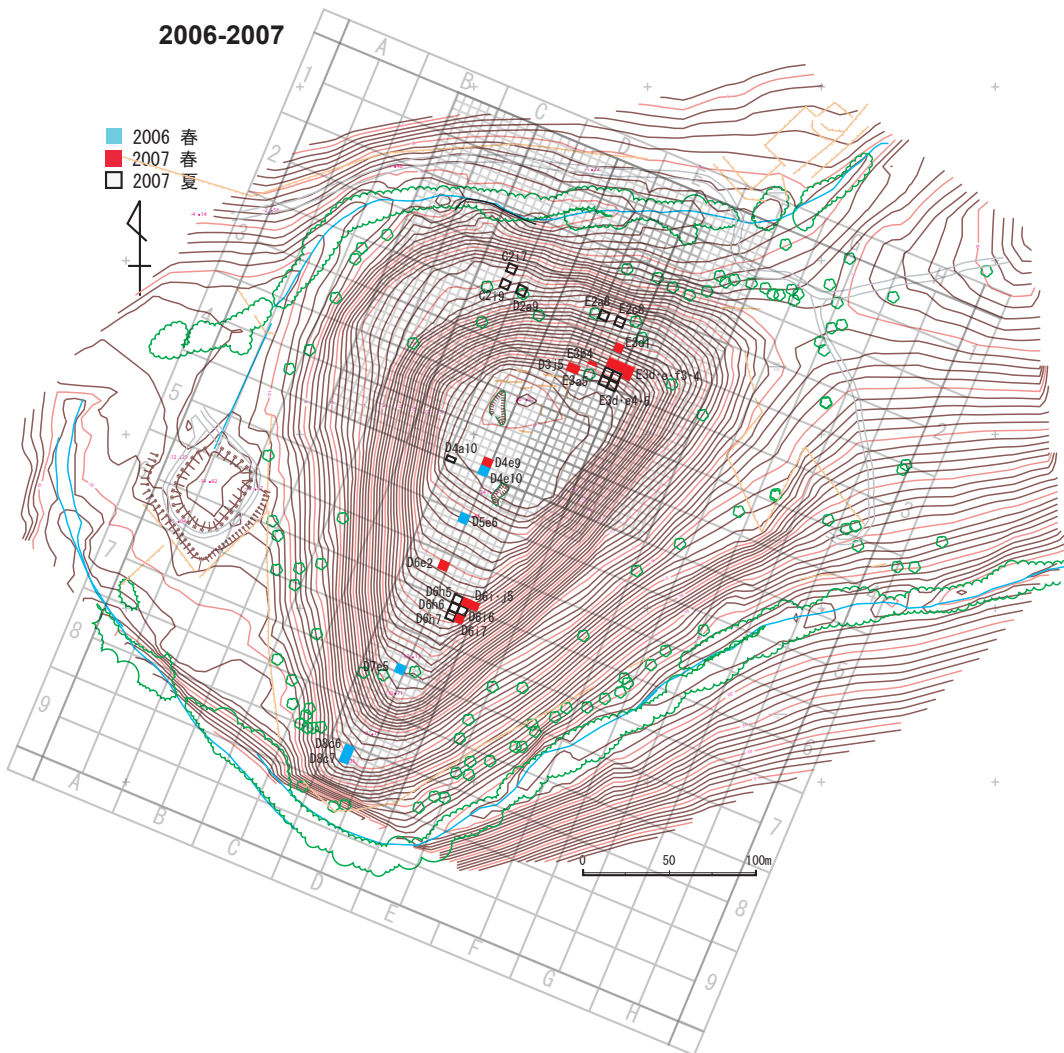


東側城壁地区を南から望む



## Tel Rekhes

2006-2007



テル・レヘシュ周辺の地形および調査区

もので一部 II 期まで使用されている。D6h5 区の北端では東西の壁を検出した。この壁は前回 D6i5, j5 区で検出した東西の壁と軸がずれており時期差が認められる。D6h5 区の壁が後に築かれている。この壁の南側には石敷が認められるが、これは鉄器時代 II 期のものである。

D6i6 区の調査では前回 D6i7 区で確認している鉄器時代 I 期の焼土層の広がりだが、この地区まで広がっていることを確認した。その下層からは径 40 センチ程の円形に丁寧に加工した礎石が南北に 3 メートル離れて検出されており、神殿の遺構である可能

性が考えられた。次期の調査ではその性格と時期を究明することが必要である。

以上に述べた諸問題を究明するべく、テル・レヘシュ遺跡第 4 次調査は 2008 年 8 月に約 1 ヶ月間行う予定である。

(天理大学附属天理参考館学芸員)

テル・レヘシュ発掘 公式 HP <http://rekhes.com/>

## 前期青銅器時代におけるセトルメント・パターンの変遷

山藤 正敏

### 1. はじめに——研究の目的

前期青銅器時代(以下、小区分を伴う場合「EB」と略記)、とりわけEB I期(前3650-3100年)からEB II-III期(EB II期=前3100-2700年、EB III期=前2700-2300年)にかけてのパレスティナ地域(パレスティナという用語には歴史的に複雑な問題が含まれているが、ここでは便宜的に後述の意味で「パレスティナ地域」という用語を使用する)においては、城壁や公共建造物の出現により示されるように、「都市化」(Urbanization)と呼称される文化的・社会的変化が顕著に認められる(Richard 1987:27; Mazar 1990:108; Ben-Tor 1992:85)。この「都市化」過程の把握のため、セトルメント・パターン論が数多く展開されてきた。

しかしながら、これらの論考には2つの大きな問題がある。1つは、現在のイスラエル領内の遺跡分布状況のみに焦点を当てているということである。ヨルダン川東岸においても各国調査隊による綿密な分布調査が行われており、また、ここで発見される前期青銅器時代の物質文化は、イスラエル領内において認められるものとほぼ同質と判断されるにもかかわらず、である。さらに、2つめの問題として、いずれの論考においても、パレスティナ地域の細分が妥当な形で行われていないという事実を挙げることができる。当然のことながら、パレスティナ地域の細分化は、数多くの遺跡が確認されている前期青銅器時代を綿密かつ統計的に分析する上で非常に重要である。

以上の2つの問題点を踏まえて、本研究では古植生・降水量などの環境的特徴及び地理的特徴を考慮したパレスティナ地域の細分を新たに行い、各細分地域における遺跡の分布状況を通時的に比較・検討する。これら一連の作業により、EB I期からII-

III期にかけての各地域での遺跡分布状況が明らかとなり、当該期に生じたと考えられる文化的・社会的変動(「都市化」)の一端を新たに把握することが可能となるだろう。

### 2. 地域細分と分析の方法

セトルメント・パターンの緻密な分析のためには、適切な地域細分が欠かせない。本研究においては、イスラエル、パレスティナ、ヨルダン西部、レバノン最南部、そして、ゴラン高原を含むシリア最南西部を「パレスティナ地域」と一括し、この地域を分析対象とする。このパレスティナ地域に対して、新たな地域細分を行う。従来、当該地域の細分が行われてきたが、部分的に歴史的な区分(中央高地におけるサマリアやユダという区分)を含み、当該期のパレスティナ地域内における地域性を示すためには、やや不適切な細分方法であったと言わざるを得ない。

そこで、新たな地域細分を行う際には、地理的特徴と環境的特徴のみを細分の根拠としたい。地理的特徴とは、等高線や河川流路による地形・水系の把握により得られた知見に従った地域的特徴を指している。また、環境的特徴とは、当該期の古植生及び現在の年平均降水量から導き出される地域的特徴を指している。特に環境的特徴については、ツァイストとボッテマによる、前3000年頃のパレスティナ地域における古植生分布の復元を参照した(von Zeist and Bottema 1991:113-14, Fig. 40)。以上の根拠に基づいて、パレスティナ地域を32地域に細分した。これら各細分地域を最小単位として、統計的手法による比較分析により、前期青銅器時代におけるセトルメント・パターンの変遷を検討する。また、4ヘクタール以上の規模を有する遺跡を大規模遺跡と定義して、同様の統計的分析を行う。

### 3. 前期青銅器時代における遺跡分布

前期青銅器時代に年代づけられる遺跡をデータベース化した結果、細別時期が明確な遺跡の総数は986遺跡に上った。これらの遺跡を対象として、細別時期に従って分布傾向を見ていく。

#### 〈EB I期〉

EB I期については計709遺跡の情報を得ることができた。当該期において、最も遺跡数が多いのは下ガリラヤ・イズレエル平野からヨルダン渓谷北部にかけての地域で、東西に分布密度が濃くなっている。この一帯には約200遺跡が集中している。また、海岸平野地域では、遺跡が南北に連続的に分布している傾向を見出すことができた。さらに、死海南東沿岸部のワディ沿いの地域にも遺跡が集中する傾向が認められた。この集中地域では、約50遺跡が確認された。

#### 〈EB II期〉

EB II期にはいると遺跡総数は521遺跡と、前時期に比べ大きく減少する傾向が見られる。また、その分布状況も大きく変化する。EB I期において遺跡が集中していた下ガリラヤ・イズレエル平野とヨルダン渓谷北部においては遺跡数が激減する。一方、EB I期には遺跡数がそれほど多くなかった上ガリラヤとシェフェラーにおいて、分布する遺跡数が2倍近くまで急増し、それぞれ40遺跡前後を示しているということは注目に値する。また、死海南東沿岸部のワディ沿いの地域の遺跡集中はEB II期においてほぼ消滅する。

#### 〈EB III期〉

EB III期では遺跡数はさらに減少し、計267遺跡を数えるのみとなる。EB II期において変動が認められた地域を検討してみると、EB II期において遺跡数が減少した下ガリラヤ・イズレエル平野とヨルダン渓谷北部では、依然として遺跡の集中が認められるとはいえ、遺跡総数はさらなる減少を示して

いる。また、EB II期において遺跡数の急増が認められた上ガリラヤとシェフェラーでも、遺跡数の減少が認められる。したがって、EB III期においては、EB II期における遺跡分布状況は維持されるものの、遺跡数の全体的減少が進行するといえる。

### 4. 大規模遺跡の分布状況

上記の分析で認められた遺跡分布状況の変動について、以下では、大規模遺跡に着目して検討を加える。

#### 〈EB I－II期〉

大規模遺跡数についてEB I期とEB II期を比較すると、総数としてはいずれの時期も97遺跡と変わらない。しかしながら、EB II期において遺跡数が増加していた上ガリラヤとシェフェラーにおいてのみならず、遺跡数が減少した下ガリラヤ・イズレエル平野とヨルダン渓谷北部においても、大規模遺跡数が増加していることが判った。結果として、海岸平野とヨルダン川東岸を除く全地域において、大規模遺跡の増加が認められた。

#### 〈EB II－III期〉

EB II期とEB III期の傾向を比較すると、EB III期においては、大規模遺跡総数が68遺跡にまで減少する。EB II期において大規模遺跡数が増加した上ガリラヤ、シェフェラー、下ガリラヤ・イズレエル平野、及びヨルダン渓谷北部については、遺跡数の増加は認められず、上記のうちイズレエル平野を除いた地域では減少傾向が認められる。これと同様に、他のほとんどの地域において大規模遺跡数の減少が認められるが、海岸平野南部においてだけは、やや増加する傾向が認められる。

### 5. 地域性の把握

以上の分析結果から、パレスティナ地域において遺跡分布が顕著に変化する3地域を抽出することができた。すなわち、1) ガリラヤ・イズレエル平



野及びヨルダン溪谷北部、2) シェフェラー、そして3) 死海南東沿岸部である。これら3地域における遺跡分布状況は、それぞれ「拡散」、「集中」、そして「消滅」という特徴的な変化を示している。以下では、各地域について、その変化の要因について考察を行う。

#### 1) ガリラヤ・イズレエル平野及びヨルダン溪谷北部

当該諸地域において、「拡散」現象が生じた理由に関しては現時点で説明が困難と言わざるを得ない。しかしながら、R・グリーンベルクによる論考は、この問題を考えるための方向性を示してくれるかもしれない（Greenberg 2001）。彼の論考に即して考えるならば、EB II－III期におけるイズレエル平野とその周辺地域において認められた遺跡の激減現象（「拡散」）と、ガリラヤ地域での遺跡の増加現象とを連動させて、前者から後者への人口移動として解釈できる可能性がある。

#### 2) シェフェラー

「集中」現象が認められたシェフェラーでは、テル・エラニ Tel`Erani やテル・マアハズ Tel Ma'ahaz 等、EB I B 期においてナイル河下流域系物質文化を伴う遺跡が密に分布しており（Brandl 1989; Amiran and van den Brink 2002; Beit-Arieh and Gophna 1999）、パレスティナ地域とナイル河下流域の関係において重要な地域（「交換の場」）であったと捉えることができる（山藤 2007）。また、この両地域の関係は、オリーブ・オイルとワインの交易を軸としており、シェフェラーを含む中央高地西部はオリーブとブドウの栽培に適した土地であったとされていることから（Finkelstein and Gophna 1993:13-14）、EB II 期における遺跡分布状況に、上記の EB I B 期における関係が間接的に影響している可能性を考えることができる。

#### 3) 死海南東沿岸部

遺跡の「消滅」現象が認められた当該地域につい

て、EB II 期における大型遺跡アラド`Arad とネゲヴ沙漠及びシナイ半島南・東部における小型遺跡との関係を参考とすることができる。EB II 期には、ネゲヴ沙漠及びシナイ半島南・東部において、ナビ・サラール Nabi Salah 等の多くの小型遺跡が確認されており、銅交易を目的としたアラドとの関係が指摘されている（Beit-Arieh 1983:47; Ilan and Sebbane 1989:154）。一方、当該地域では、その少し南方に銅の採掘地として著名なフェイナン Feinan が位置しており、銅石器時代から EB I 期にかけての銅生産が認められているが（Ilan and Sebbane 1989:142-48; Levy et al. 2001:162）、EB II 期に入ると、この地における銅生産の証拠が認められなくなる（Ilan and Sebbane 1989:156）。この現象を銅生産の終焉と関連づけるならば、近隣の当該地域における遺跡の「消滅」現象と関連している可能性がある。

## 6. おわりに

上記の検討において認められた移住形態の地域差は、EB I 期から EB II－III 期におけるパレスティナ地域が、必ずしも一定の行程にしたがって「都市化」に至ったわけではないことを示している。「都市化」の過程においては、遺跡の「拡散」、「集中」、及び「消滅」という少なくとも3種類のセトルメント・パターンの変化が認められたからである。この現象は「都市化」の過程が各地域で多様な条件の下に進行した可能性を示している。今後、出土遺物の詳細な分析により、本研究で認められた地域的多样性をさらに抽出し、「都市化」の様相を明らかにしていく必要がある。

（早稲田大学博士課程）

附記 — 本稿は2007年10月8日の東京天理教館（東京・神田）における「第7回イスラエル考古学研究会」での発表内容を要約したものである。この発表に先立ち、発表者は『西アジア考古学』へ同テーマの論文を寄稿していた（「前期青銅器時代 I－III 期パレスティナ地域におけるセトルメント・パターンの変遷と地域性」『西アジア考古学』第9

号 2008 年)。このため、上の要旨においては、研究の核心部分をかかなり割愛せざるを得なかった。したがって、本研究の詳細については上記の論文をご参照願いたい。

## 引用文献

Amiran, R. and E. C. M. van den Brink

2002 The Ceramic Assemblage from Tel Ma'ahaz, Stratum I (Seasons 1975-1976). In E.C.M. van den Brink and T.E. Levy (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd millennium BCE*, 273-279. London/New York, Leicester University Press.

Beit-Arieh, I.

1983 Central-Southern Sinai in the Early Bronze Age II and its Relationship with Palestine. *Levant* 15:39-48.

Beit-Arieh, I. and R. Gophna

1999 The Egyptian Protodynastic (Late EB Ib) Site at Tel Ma'ahaz: A Reassessment. *Tel Aviv* 26:191-207.

Ben-Tor, A.

1992 The Early Bronze Age. In A. Ben-Tor (ed.), *The Archaeology of Ancient Israel*, 81-125. New Haven, Yale University Press.

Brandl, B.

1989 Observations on the Early Bronze Age Strata of Tel Erani. In P. de Miroschedji (ed.), *L'urbanisation de la Canaan à l'âge du Bronze ancien*, 357-387. Oxford, BAR International Series 527 (ii).

Finkelstein, I. and R. Gophna

1993 Settlement, Demographic, and Economic Patterns in the Highlands of Palestine in the Chalcolithic and Early Bronze Periods and the Beginning of Urbanism. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 289:1-22.

Greenberg, R.

2002 *Early Urbanizations in the Levant: A Regional Narrative. New Approaches to Anthropological Archaeology*. New York and London: Continuum.

Ilan, O. and M. Sebbane

1989 Copper Metallurgy, Trade and the Urbanization of Southern Canaan in the Chalcolithic and Early Bronze Age. In P. de Miroschedji (ed.), *L'urbanisation de la Canaan à l'âge du Bronze ancien*, 139-162. Oxford, BAR International Series 527(i).

Levy, T. E., R. B. Adams, A. J. Witten, J. Anderson, Y. Arbel, S. Kuah, J. Moreno, A. Lo, and M. Wagonner

2001 Early Metallurgy, Interaction, and Social Change: the Jabal Hamrat Fidan (Jordan) Research Design and 1998 Archaeological Survey: Preliminary Report. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 45: 159-187.

Mazar, A.

1990 *Archaeology of the Land of the Bible: 10,000-586 B.C.E.* New York, Doubleday.

Richard, S.

1987 The Early Bronze Age: The Rise and Collapse of Urbanism. *Biblical Archaeologist* 50:22-44.

van Zeist, W. and Bottema, S.

1991 Late Quaternary Vegetation of the Near East. *Beihefte zum Tübinger Atlas des Vorderen Orients, Reihe A (Naturwissenschaften) Nr. 18*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.

山藤正敏

2007「紀元前 4 千年紀後半期パレスティナ地域への文化流入——ナイル河下流域系土器の分析から——」『西アジア考古学』8 号 67-86 頁



研究発表要旨 (2006 年 10 月・第 5 回研究会)

発掘作業における修復について——ヒッポス遺跡を事例として——

岡田 真弓

発表者は 2006 年 7 月 23 日から 27 日までハイファ大学率いる発掘調査<sup>(1)</sup> にボランティアとして

参加した際、数日前に発掘された基壇と思われる発掘遺構の保存・修復作業を手伝う機会を得た。本発表では、発表者がヒッポスで経験した発掘と同時に  
行われた保存・修復<sup>(2)</sup>作業の紹介、そこから見る  
発掘プロジェクトの課題、以上2点について考察する。

ヒッポス遺跡の基壇が出土した場所は、遺跡の中央広場（フォルム）に隣接したヘレニズム時代と考えられている複合施設の東側である。基壇の大きさは縦横約1メートル30センチ、高さが1メートル35センチほどで発掘期間の第3週目の中ごろに検出され、第3週終了日には完全に出土していた。ヒッポス遺跡は国立公園局の管轄下であり、当局から派遣された修復家キミ・ママンが遺構の修復を担当している。本格的な修復作業が始まったのは第4週の1日目で、最初に基壇内部の修復を施し、2日目、3日目に側面の亀裂の接合作業を行った。ママンのモットーは当時と同質の材料を使用して修復するというもので、石灰岩、砂、水、そして大理石の粉を利用してセメント、モルタル、コンクリートを作り修復に使用していた。

本稿では詳細な作業工程の紹介は割愛するが、基壇の割れ目の修復方法については述べておきたい。基壇の四方の面では亀裂や石同士の結合部分のずれなどが見られる。ママンはモルタルの水硬性を利用して補強を行った。まず亀裂の表面を水に浸した脱脂綿で一部分だけ残して覆い、水を満たした注射器で、覆われていない部分から注入する。次に注入するモルタルの硬化を早める為に、全体に水を染み込ませておくのである。モルタルは湿った亀裂内に注入されて空洞部分に広がっていくが、脱脂綿が壁の役割を果たし表層より盛りだすことはない。亀裂内の湿度を高く保つと同時に、修復部分の表面の仕上がりを整える脱脂綿使いは特筆に価する。

作業過程の中には最終的に「復元作業」となった部分があった。基壇の下部で大幅に欠損している部位に、グリッド内にある小石を詰めモルタルで成形したのである。記念建造物および遺跡の保全と修復の為の国際憲章（ヴェニス憲章）第15条「発掘」

部分では、復元（復原）について

「(前略) 現地に残っているばらばらになっている部材を組み立てることだけは許される。組み立てに用いた補足材料は常に見分けられるようにし、補足材料の使用は、記念建造物の保全と其の形態の復旧を保障できる程度の最小限度に留めるべきである」(1965年 ICOMOS 採択)

と規定されている。修復の際、当時と同質の材料をできる限り現場にある材料から作り、補強材料は常に見分けられるようになっているが、例えば下部の欠損部を成形した際に用いた小石は果たして基壇から欠け落ちたものなのか定かではない。更に発掘されて間もない基壇の用途は不明である為、修復作業の方法や計画は非常に慎重でなければならない。「補強」という名目で修復された形は「復元（復原）」ではないが、いったん成形され可視形となったイメージは歴史解明の判断に影響を与えるのではないであろうか。

これまで、発掘作業と同時進行で行われてきた処理は仮補強がほとんどであったが、今回ヒッポス遺跡出土の基壇に施されていた処理は保存を目的とした修復作業であった。まさに出土した後、瞬間冷凍されたような形である。昨夏の発表で紹介したヒッポス遺跡は今後数年間続くと目される、更に来期もそのグリッドを掘る事が確定している場所での仮補強、修復作業はどのように進めるのかを示した一例である。

発掘作業はある意味で破壊行為であり、更に地上に表出した遺跡はその瞬間から劣化の速度が速まるので、今後の研究調査や安全性の為に発掘と同時進行の仮補強や修復作業が必要とされる。しかしイスラエル国は考古遺跡と政治や国民の歴史観、更には観光産業を含む国外へのアピール等が複雑に結びついており、その考古遺跡の行く末は単純に学術のみに帰依しない場合がある。「何」の為に、「何」を残すのか、「誰」がそれらの決定を行うのか。今後も、その遺跡の地域社会、歴史、地勢、経済、政治、における位置づけを踏まえた上で遺跡の埋め戻し、修



復、活用も踏まえた未来を、きちんと発掘プロジェクトに組み込んだ在り方を考えて行きたい。

(慶應義塾大学修士課程 環境デザイン専攻)

## 註

- (1) ハイファ大学、ポーランドのワルシャワ大学、アメリカのコンコルディア大学の共同プロジェクトで2001年から始まり今季は6シーズン目にあたる。
- (2) 本発表では『ベニス憲章及び考古学的遺産の管理・運営に関する国際憲章』とアンソニー・M・タン著『歴史都市の破壊と保全・再生』で定義された語法を参照した。「保存 (conservation)」とは対象物の文化財的価値を評価し、これを現状のままに、或いは同様の素材を用いた最低限の補強などを行って、対象物の特性を凍結的に維持することである。修復とは復元と復原の二通りの意味を持つが、目的は破損した部分を作りなおすことである。(仮)補強とは今後の調査に支障をきたし、来期の発掘調査までの保存維持が困難と判断された場合の緊急措置を施す。遺物自体へのダメージは最小限にし、更に補強処理がいずれ解除される事を前提とする。

## □ 第6回イスラエル考古学研究会・報告 □

2006年12月22日(金)

於:八王子市北野南部会館



## 論考

### 都市とは何か

巽 善信

産業革命が起きて近代化が進むと、農村と明らかに対立する際だった存在として都市は現れてくる。こうした近現代的な都市概念を通して、古代都市を見ようとしたのがG・チャイルド以来の考古学者と言える。都市は実際我々の目の前に存在し、どういふものか明確ではないにしろ、ある程度実感として

桜井 清仁 (応用地質株式会社)

「蛍光X線分析装置の実際」

小野塚 拓造 (慶應義塾大学研究生)

「鉄器時代Ⅱ期の北部シャロン平野 — 土器を中心に —」

月本昭男 (立教大学教授)

「鉄器時代Ⅰ期 — イスラエルの起源との関わりで —」

## □ 第7回イスラエル考古学研究会・報告 □

2007年10月8日(月・祝)

於:東京天理教館9階ホール

月本 昭男「考古学は聖書の読み方を変えられるか」

(天理ギャラリー「テル・ゼロール展」講演会)

日野 宏「テル・レヘシュ第3次発掘調査」

山藤 正敏「前期青銅器時代におけるセトルメント・パターンの変遷:危機と発展の軌跡」

「テル・ゼロール展」の見学・意見交換会

## □ 第8回イスラエル考古学研究会・報告 □

2007年12月22日(土)

於:八王子市北野南部会館

長谷川 修一「低年代説から見たエン・ゲヴ遺跡」

日野 宏「エン・ゲヴ遺跡下層列柱式建物の検討」

エン・ゲヴ遺跡に関する意見交換

理解できるが、古代の都市となるとそうはいかない。つまり近現代の都市の定義を明確にする以前に、古代の都市の状態がはるかに分からないという現実があるからである。さらに、今発掘している遺跡が都市であるのかどうか、発掘で分かることから考古学者は判断を強いられるから、いきおい現実的対応を迫られる。

エジプトの考古学者M・ピータクは古代都市の定義として次の9点をあげている — (1) 高密度の居住とある程度の面積、(2) 密集した住居形態、(3) 宗教、行政、産業、その他の生活区画が区画されていること、(4) 地域に於ける行政的、商業

的、司法的中心であり、交通の要衝であること、(5) 非農業共同体であること、(6) 工業、手工業、商品、商店の集中、(7) 労働・職業の分業と社会的階層性、(8) 宗教センター、(9) 防御の中心。ただし小泉龍人が指摘するように、これらの属性を多く持った集落は、より都市的性格が強いということの意味するに過ぎない(小泉 2001、4 頁)。またこれらを常に確認できるものでもない。金関恕が指摘するように、実際オリентで発掘している考古学者は、ある程度の広さと人口密度が認められ、城壁のような防御施設があり、神殿や王宮があり、公共建築物と一般的な居住区があれば都市としている(金関 1998、64-65 頁)。しかし現実的対応を強いられているからといって、都市とは何なのかという本質的な問題を避けて良いと言うことではない。

常木晃は都市とは何かを考える際、社会学者藤田弘夫の考えを参考にしている。つまり「都市の本質とは人々の統合する権力が形成されることにあり、そのような権力の存在を人々が容認するのは権力が人々にさまざまなサービスを提供するからである」と。常木はこの考えに基づき古代都市の基本的なサービスとして、安全確保、食料の供給、精神的充足の3つをあげている。この3つのサービスに対応する遺構として、安全確保では防御施設・王宮、食料の供給として大規模な食糧倉庫、精神的充足として神殿を挙げている。この基本的機能と施設が出そろうのが西アジアでは、ウルク後期であるとしている(大津・常木・西秋 1997、106-107 頁)。しかし、ウルク後期といえば都市国家が成立した時期とほぼ一致する。藤田の都市定義にもとづく捉え方では、限りなく都市と都市国家が近づいてしまうことになる。南メソポタミアではウバイド期ですでに都市性は認められ、ウルクの都市との線引きは、人により異なる。つまりウバイドの都市的な村もウルクの都市も実は、さほど変わりはないのである。都市は都市国家が成立するはるか以前から登場しているのである。社会学者の藤田にとっては当然であるが、近現代都市を通して定義づけている。近現代の都市は、国家の枠組みの中にある。都市なるもの

を機能的に捉えて行くと、そこに国家の機能あるいはその関与も含まれてくるのは致し方ない。これをそのまま古代に持ってくるわけにはいかない。国家が成立する以前から成立している古代都市に国家概念を持ち込むわけにはいかないからだ。国家というフィルターを通さず、都市をイメージする必要がある。

現在の都市をオリジナルな発想で鋭く捉えている人物に吉本隆明がいる。かつて、自然は人間にとって揺るぎない大きな存在であったが、今や人間は自然より自然らしいものを人工に作り出すことができる段階にあると言う。「人間と地面との物質代謝という観点から〈土地〉という概念を考えたいなら、またその代謝の主な環として農業生産や織物生産をかんがえたいなら、〈土地〉が「地面」である必要もないし、織物が植物や動物繊維である必要もない。……また、自然的な自然が永久不変だという認識はまったく必要ない。大都市は自然よりもっと自然な人工的自然をつくりだせるし、地面よりもっと豊穡な人工的土地である〈土壌〉が考えられて、人工都市を包むこともできる。」(吉本 2003、202 頁)。人々の統合する権力が形成されることが都市の本質とはどうしても思えない。むしろ人工的自然の形成こそが都市の本質ではなからうか。自然より自然らしいものを人工的に作り出して行くことに都市のアイデンティティがあるように思える。

古代においてすべてであった自然の中に、人工的自然である都市を形成するためには、自然を遮断するとともに、自然とは異なる世界概念を持つ必要がある。自然は「即時的」な存在であるが、都市は「対峙的」な存在である。都市が成立できるためには、創造神話と現存世界を説明する理論が必要だと言える。その神話と理論、つまり世界概念が成立すれば、後はその実体化としての空間造りが始まる。これこそが都市の始まりではないかと思う。まずは自然を遮断しようとするはずである。もちろん視覚的にである。たとえその内部の物のほとんどが自然で構成されていても、自然を視覚的に遮断し、自然から切り取られた空間が人工的自然には必要だからで

ある。その中では木々も人工的に植えられ、水も人工的に流される。たとえばバビロンの空中庭園がある。新バビロニアのネブカドネザル2世がメディア出身で、砂漠に慣れない王妃アムティスを慰めるためにバビロンに建造したとされる庭園で、世界七不思議に上げられていることからよく知られている。宮殿の中に5段の階段状になったテラスを作り、そこに土を盛り、水を上まで汲み上げて下に流し、樹木や花などを植えたと考えられている。遠くから見ると、あたかも空中に吊り下げられているように見えたことからこの名がある。地面に草木が生えるという自然からは乖離した人工自然の造築といえる。現在の都市にもよく見受けられる。たとえば大阪・難波パークスのビル屋上にある庭園がそうである。時代を超えた類似性がある。また現存世界の仕組みを維持する装置として、立派に飾り立てられた神殿も現れる。

こうした空間を自然を遮断し、区画して造るのである。都市あるいは都市性のある大きな村に周壁があるのはこのためと思われる。後に都市間戦争が起きることで防御施設として城壁はその第一義的な機能を有することになるとしても、元からそうであったかどうか疑わしい。小泉は次のように述べている。「ウルク期以前のメソポタミアの先行例からたどってみる。すでにサマッラ期のソワンⅢ層で約2.4ヘクタールの範囲を周壁が囲っていた。この周壁と外側に隣接する溝はメソポタミア地方でもっとも古い防御施設として紹介されているが、筆者は軍事的な利用に疑問を感じている」（小泉2001、162頁）。最初期の周壁を防御施設とする解釈に疑問を持たれていることは高く評価できる。小泉は浸水防止用と考えているのだが、機能性を重視する必要はあるのだろうか。

現在それを確かめられるのはディズニーランドである。高い周壁で外界を遮断することで、現実とは全く異なるファンタジー世界を演出している。それがなければもちろん見えるはずの海や山という第一次的自然だけでなく、現実に存在する居住空間でさえも第二次的自然と見なし、これらの自然を遮断す

ることでディズニーのファンタジー世界である高次な人工的自然を生み出している。もし外界が少しでも覗ければ興奮めし、ミッキーを見て飛んで喜ぶ自分自身が不思議な存在と思えるかもしれない。防御を第一義的に、この高い周壁を捉える者はまずないであろう。

都市の本質は人工的自然であり、自然にとけ込んで自然の中で「即時的」に暮らす「村」とは原理的に異なる。

(天理参考館)

## 参考文献

- 大津忠彦・常木晃・西秋良宏『西アジアの考古学』同成社1997年  
金関恕「都市の出現」『都市と工業と流通』（田中琢・金関恕編）小学館1998年  
小泉龍人『都市誕生の考古学』同成社2001年  
吉本隆明「人工都市論」『ハイ・イメージ論（I）』ちくま学芸文庫2003年

\* \* \* \* \*

## 書籍紹介

- I. Finkelstein and A. Mazar, *The Quest for the Historical Israel. Debating Archaeology and the History of Early Israel*, ed. by Brian B. Schmidt, Society of Biblical Literature, Atlanta 2007. ISBN 978-1-58983-277-0

「現在イスラエル考古学をリードしている考古学者を二人あげよ」と言われたら、大半の人はイスラエル・フィンケルシュタインとアミハイ・マザールをあげるのではないだろうか。本書はこの二人をゲストに招いて2005年10月にデトロイトで開かれた講演会の記録を中心に編集されたものである（フィンケルシュタインについてはN・A・ジルバーマンとの共著 *Bible Unearthed* [教文館から邦訳近刊]からの再録を含む）。この二人が選ばれるのは、イスラエルの考古学全般ではなく、いわゆる「(旧約



聖書時代」に限定した場合の話だが、この時代（考古学的には青銅器時代から鉄器時代）がイスラエルで考古学的調査が産声をあげたときからの関心の中心であり、旧約聖書および古代イスラエル史への関心がイスラエル考古学の原動力として働いていることは今でも同じであろう。

本書では「アブラハムの年代」「出エジプト」「ヨシュア記の征服物語」などこの100年の間にくり返し論じられてきた問題について「現在の考古学は何を言い得るか」がまとめられているだけではなく、最近歴史との関連で俎上にのぼることの多い「ダビデ・ソロモン王国」「分裂王国時代」も考古学的な視点から詳しく扱われている。こうした点からすれば「聖書考古学」の本であるには違いないが、本書はイスラエルの考古学が旧来の意味における「聖書考古学」からどのように変わってきているのかを確認させる内容となっている。

「歴史と聖書と考古学」の関係については1990年代以降、盛んに論じられ、特に歴史と聖書の関係については極端に否定的な見解が声高に述べられてきた。それに対する明確な応答は述べられていないが、そうした状況への戸惑いも本書が生み出された要因のひとつであるには違いない。細かな学問的な議論の多くは省略されているが、時として定説であるかのように扱われている話題を再考するための視

点が多く詰め込まれ、「聖書考古学」の新たな100年のスタートラインが本書には示されていると言える。(Mi.)

### ◆ イベント案内 ◆

天理参考館・第57回企画展

「古代ギリシア美術への誘い」

2008年4月9日(水)～6月9日(月)

於：天理参考館(奈良県天理市)

公開講演会〈トークサンコーカン〉

『東地中海の遺跡をめぐる』シリーズ(全3回)

4月26日(土)

「古代ギリシアの遺跡と美術」飯降 美子

5月24日(土)

「キプロス—地中海をつなぐ島—」巽 善信

6月21日(土)

「パレスチナにおける日本調査隊の軌跡」日野 宏

\* \* \* \* \*

### 編集後記

○コハヴィ先生が急逝された。謹んで哀悼の意を表す。昨夏の調査の折、エン・ドルの私たちの宿舎を訪ねて来られた。入院されていると聞いていた私たちは、突然の訪問に驚いてしまった。そうした私たちを嬉しそうに見ておられたのを思い出す。「お元気だな」と思った自分が情けない。無理をしてでも会いに来られたのは、これが最後になると分かっておられたからであろう。

○今号も遅れてしまった。ご容赦願いたい。(Y.T.)

### ●●● 目次 ●●●

テル・レヘシュ第3次調査・速報	日野 宏 1
研究発表要旨	
前期青銅器時代におけるセトルメント・パターン の変遷	山藤 正敏 4
発掘作業における修復について—ヒッポス遺跡 を事例として—	岡田 真弓 7
研究会報告	9
論考 都市とは何か	巽 善信 9
書籍紹介	11
イベント案内	11
編集後記	12

イスラエル考古学研究会 ニュースレター No. 5

2008年2月10日

編集：巽 善信 宮崎 修二

発行：イスラエル考古学研究会

〒632-8510

奈良県天理市杣之内町 1050 番地

天理大学文学部 考古学・民俗学共同研究室内

e-mail: israelkai@yahoo.co.jp

郵便振替口座

00960-3-79256 イスラエル考古学研究会